

平成25年度北海道大学情報基盤センター共同研究成果報告書

1. 研究領域番号 A5
2. 研究課題名 多文化志向の教育コンテンツ・デザイン
3. 研究期間 平成25年4月1日 ~ 平成26年3月31日
4. 研究代表者

氏名	所属機関・部局名	職名	備考
田邊 鉄	北海道大学・情報基盤センター	准教授	

5. 研究分担者

氏名	所属機関・部局名	職名	備考
平林 義治	北海道大学・情報基盤センター	准教授	
長野 督	北海道大学・メディアコミュニケーション研究院	教授	
李 知恩	北海道教育大学・教育実践分野	准教授	
李 美龍	北海道大学・工学研究院	特任助教	

6. 共同研究の成果

下欄には、当該研究期間内に実施した共同研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、共同研究申請書に記載した「研究目的」と「研究計画・方法」に照らし、800字~1,000字で、できるだけ分かりやすく記載願います。文章の他に、研究成果を端的に表す図表を貼り付けても構いません。なお、研究成果の論文・学会発表等を行った実績（発表等の予定を含む。）があれば、あわせて記載して下さい。

本研究は、昨年度実施した2つの研究課題(1)「教育におけるデジタルコンテンツとコミュニケーション・デザイン」ならびに(2)「ICT時代の言語教育環境と教材開発」で検討した内容を踏まえて、教育の分野で制作・活用されるデジタルコンテンツに求められる機能について、主として多文化・多言語主義の観点から検証を行ったものである。

(1)においては、教授者の狙いを達成しようとする教授プロセスと学習者のニーズ及び動機に支えられた学習プロセスを、双方向で重なり合うコミュニケーション・プロセスであると捉え、そのプロセス設計において、感性的なコミュニケーション・デザインという視点を導入しうることを示した。一方(2)においては、ヨーロッパやカナダの先進的な多文化・複文化教育に触れ、教育における「すべての文化が対等に扱われるべき」という多文化主義的アプローチは、「文化というコンセプトそのもの」が持つ抑圧性や境界の恣意性を自覚しながら進める必要があることを再確認し、その中で、「異なる言語・文化に対する『気づき』」を促すために、教条的なテキストではなく、感性的なプロセスによって学ぶようなコンテンツ・デザインが望ましいという知見を得た。

これらの研究に共通する「感性的なコミュニケーション・プロセスのデザイン」「デザイン教育の応用」という考え方・手法を深化させることによって、感性情報学、教育工学、デジタルコンテンツ、デザイン教育、などの処分野への貢献が期待されると考え、デザイン教育の専門家を招いて公開講演会を開催し、関連分野の研究者と共同討議を行った。

(研究成果のつづき)

<公開講演会>

デザイナーであり、デザインの事業化を進める経営者であり、韓国嘉泉大学でデザイン文化運動プロジェクトに携わるなど、最新のデザイン教育を推進する Shur, Ki-heun 氏と、米国サンノゼ州立大学でグラフィックデザインにおけるニューウェーブとその教授法について研究・実践に携わる Chang Sik Kim 氏を招き、北海道大学情報基盤センター共同研究講演会「教育におけるデジタルコンテンツとコミュニケーション・デザイン」を開催した。Shur 氏からは韓国で取り組まれているユニークなデザイン教育プログラムを紹介いただき、現代におけるデザインの重要性やデザイン教育の未来等の有益な提言を頂いた。Kim 氏は、ご自身の取り組まれているデザイン教育活動を中心に、ICT時代のデザイン、デザイン教育のあり方についてお話しいただいた。

(プログラム)

平成 25 年 10 月 26 日 於.北海道大学情報基盤センター

15:00-16:00 講演 1 Shur, Ki-heun (韓国嘉泉大学 教授)

演題「デザイン教育におけるプログレッシブ実験：
デザイン文化運動プロジェクト」

16:15-17:15 講演 2 Chang Sik Kim (米国サンノゼ州立大学 教授)

演題「新しいメディア環境におけるニューウェーブデザイン原則と教授法」

17:20-18:00 質疑応答